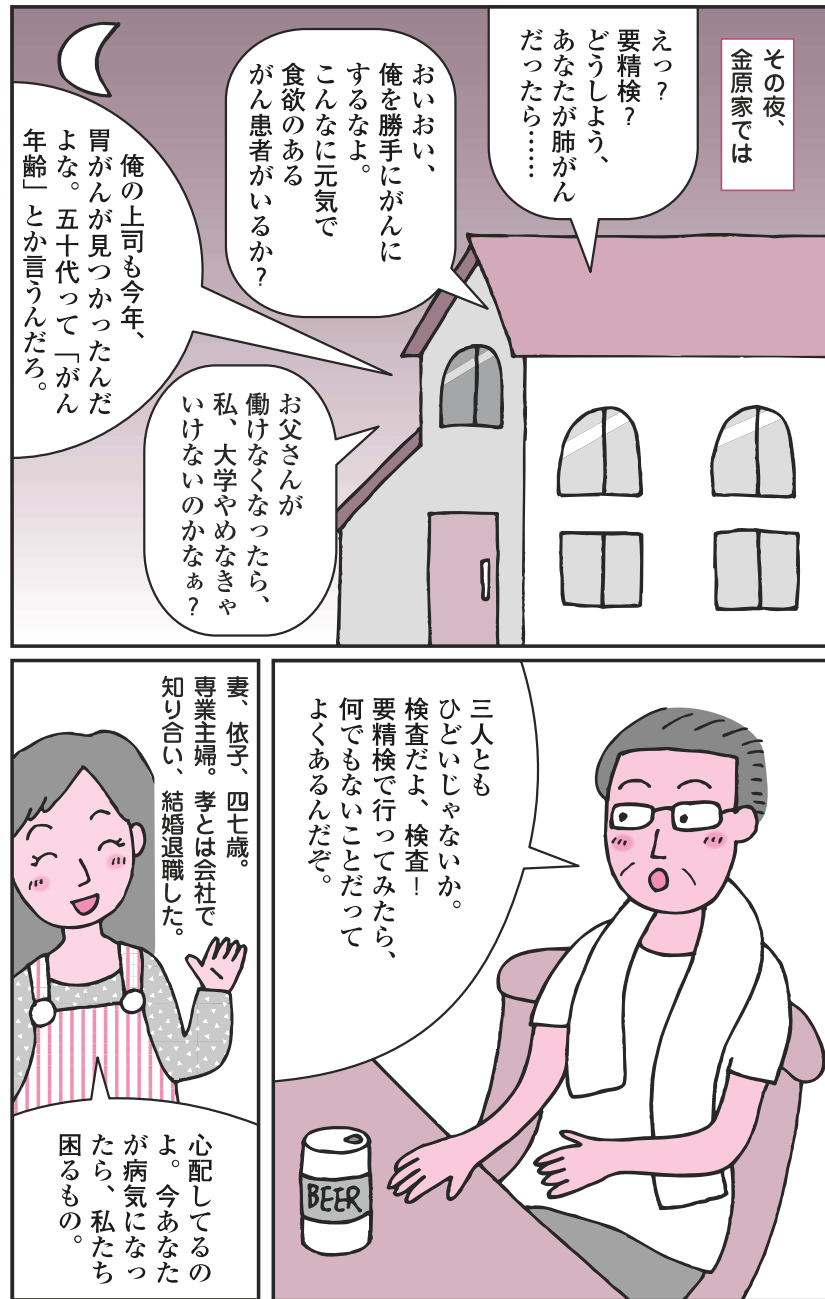


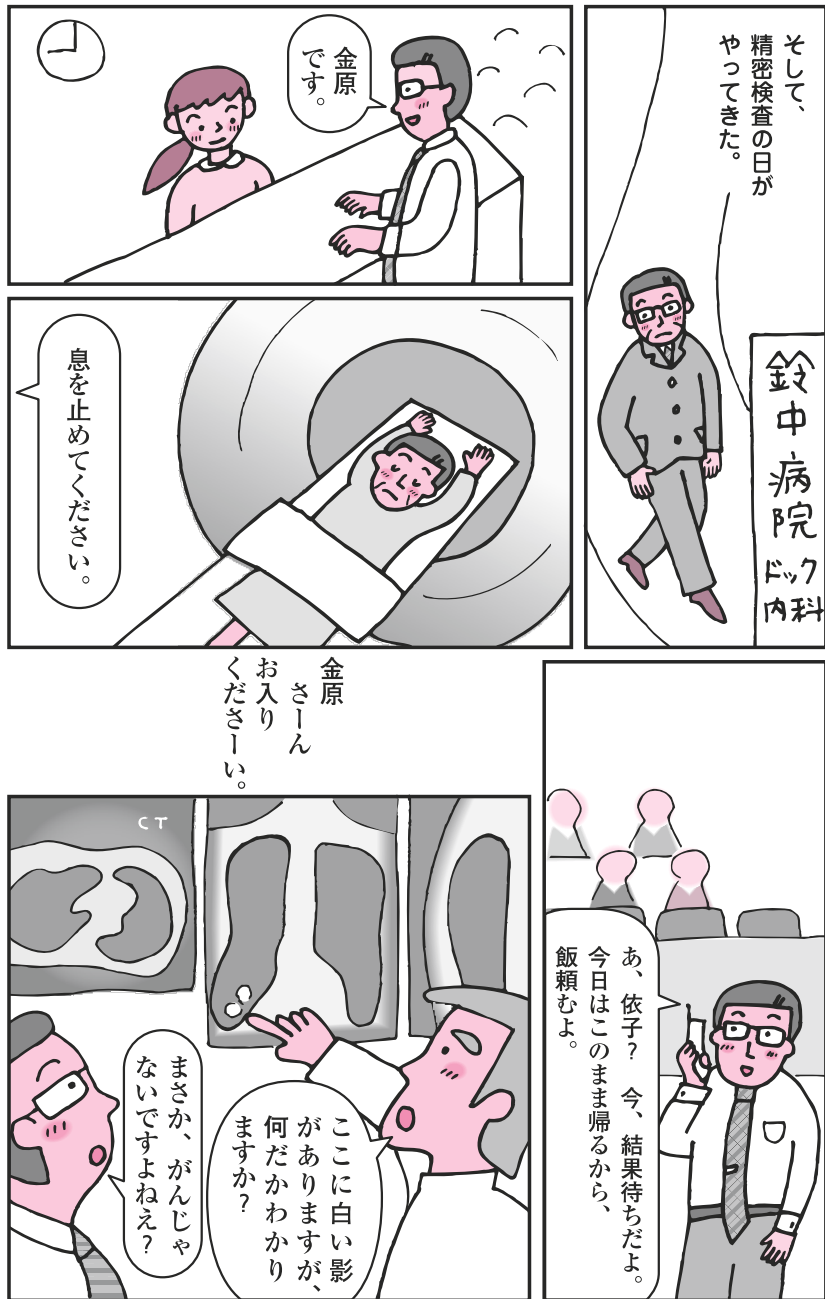


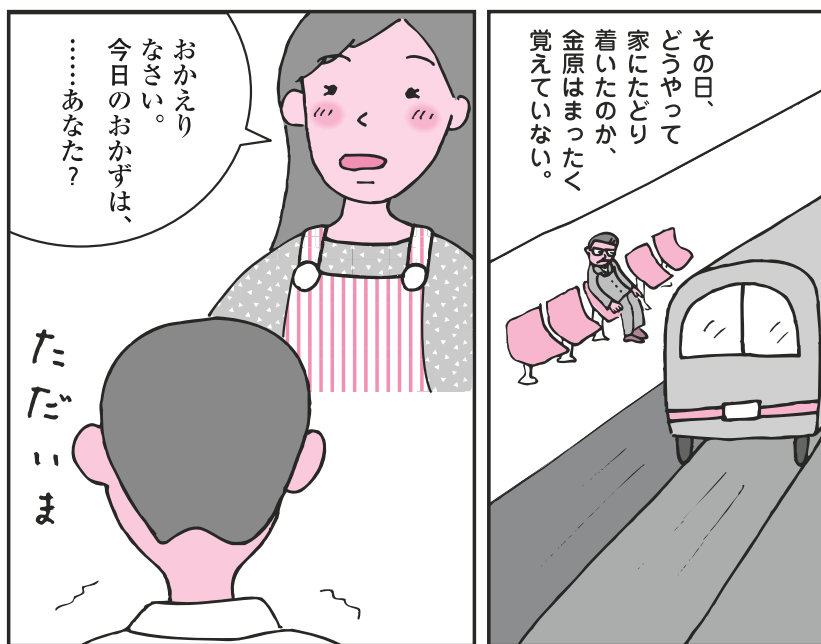
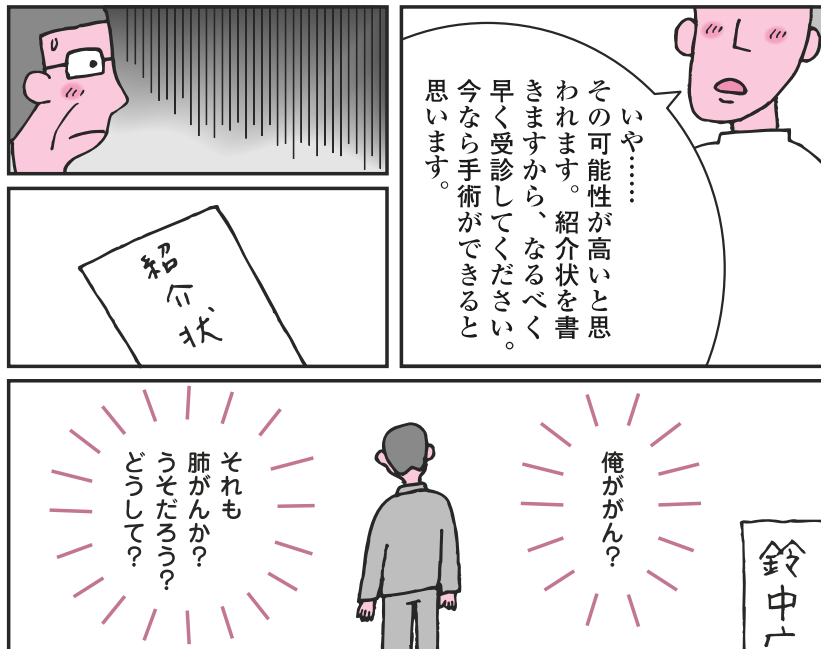
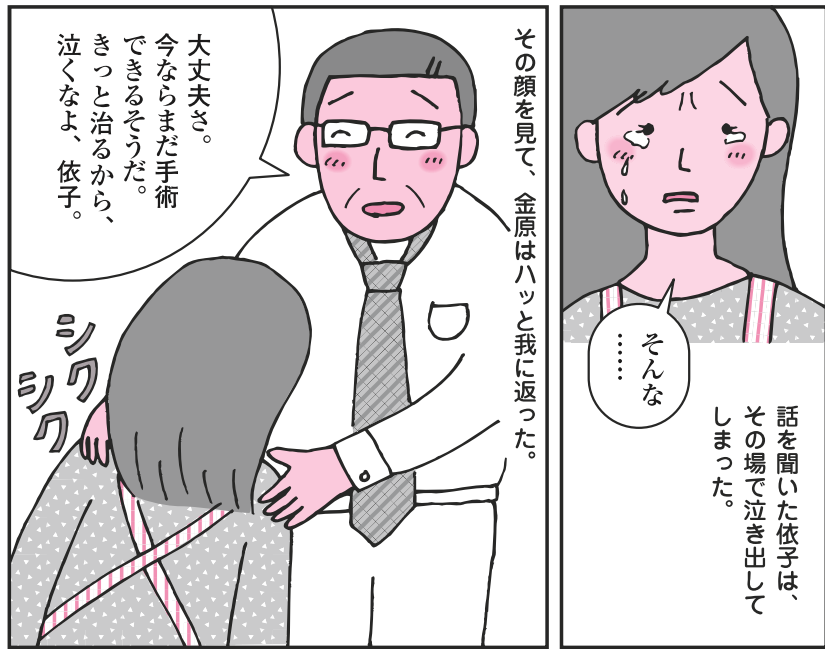
悪性疾患の在宅医療



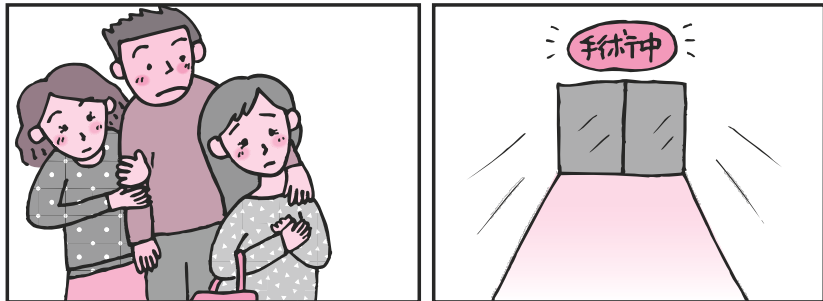
(登場する人物、医療機関、その他団体等は架空のものであり、実在のものとは関係ありません)







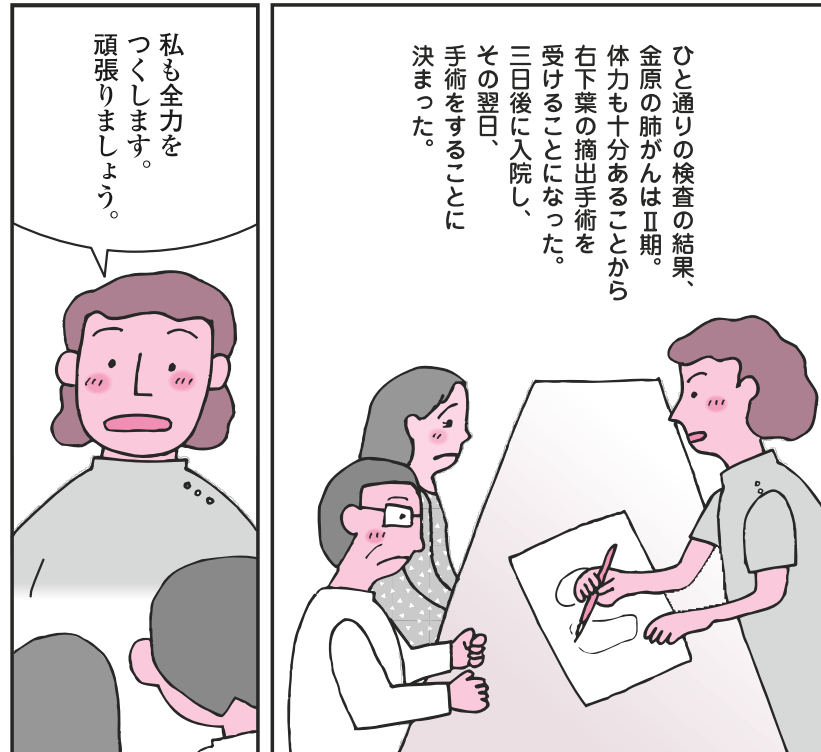




大きなリラックスチェアは聡が買ってくれた。



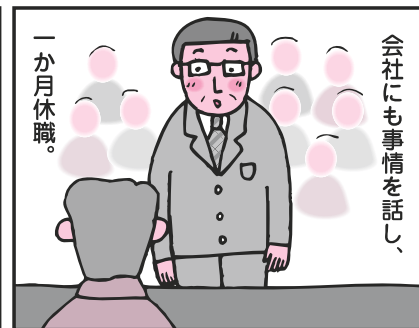
約二週間で退院できたが、傷口の痛みはその後も続いた。



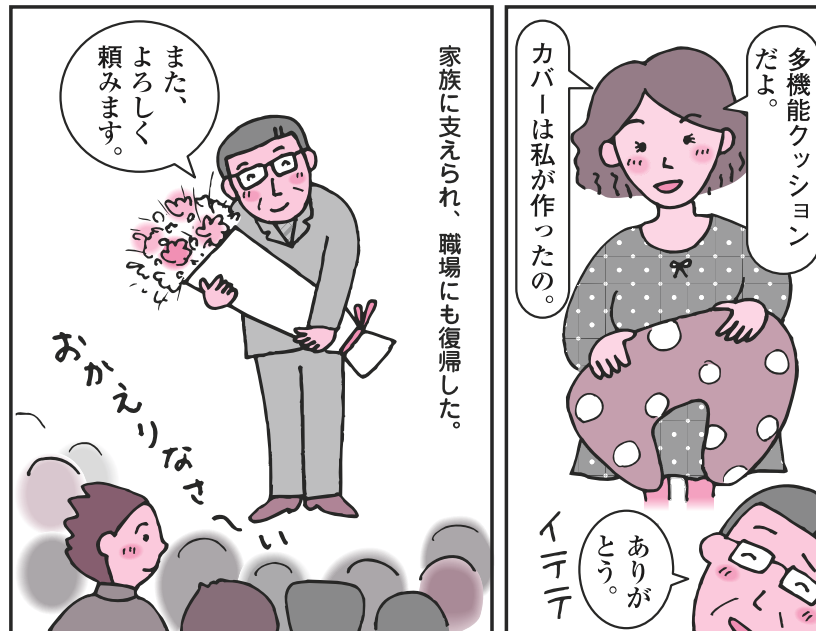
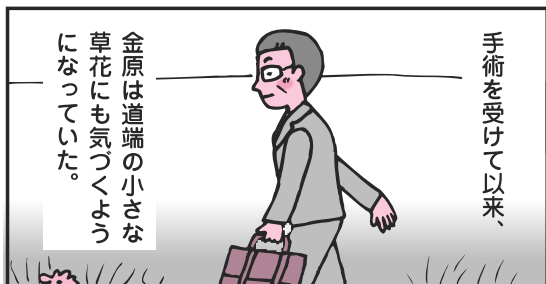
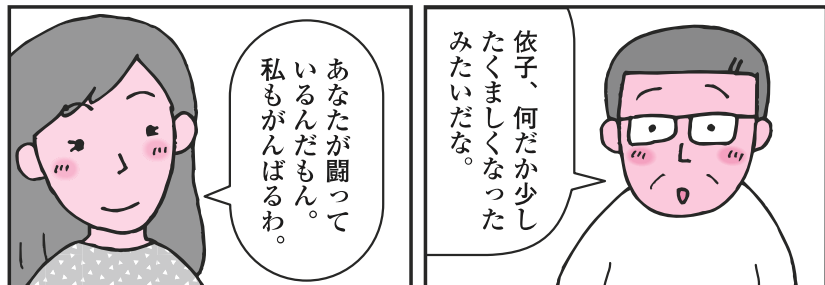
その夜、聡と舞に話をした。

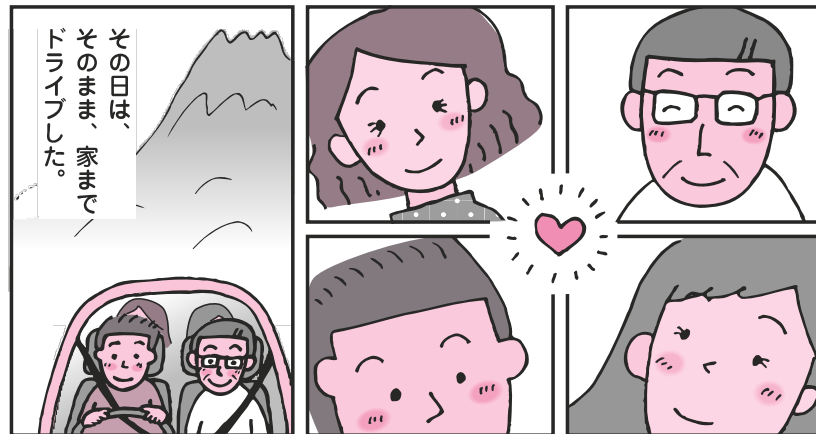
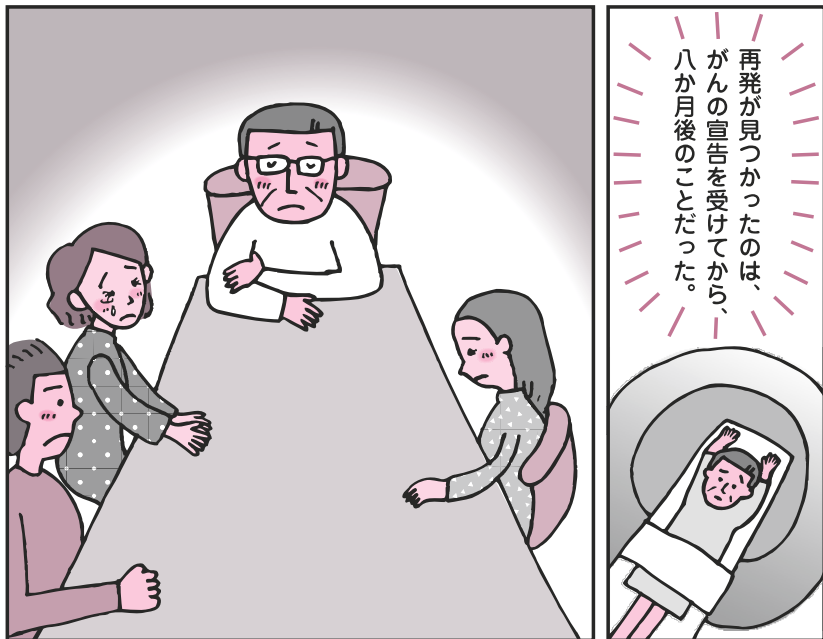


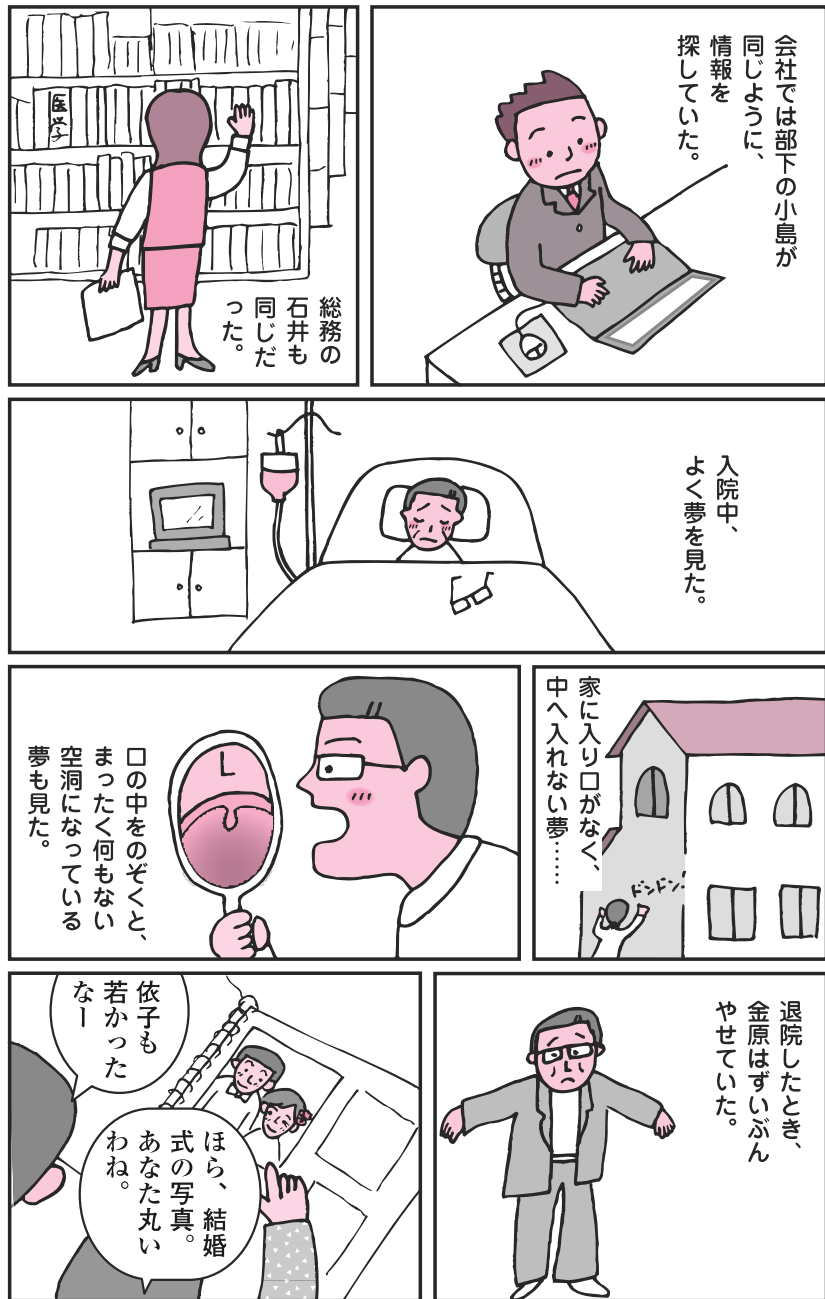
田舎の両親にも電話で報告した。



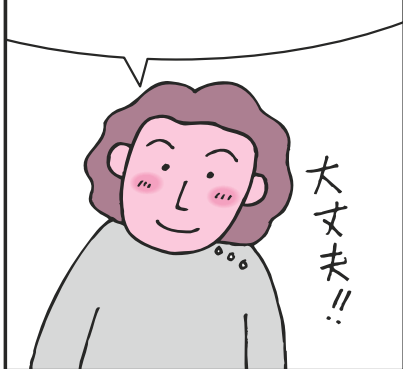
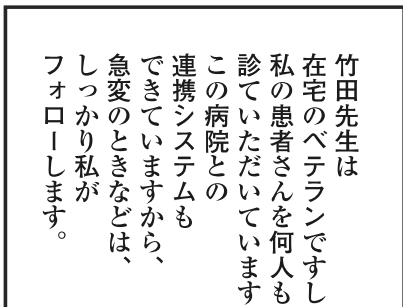
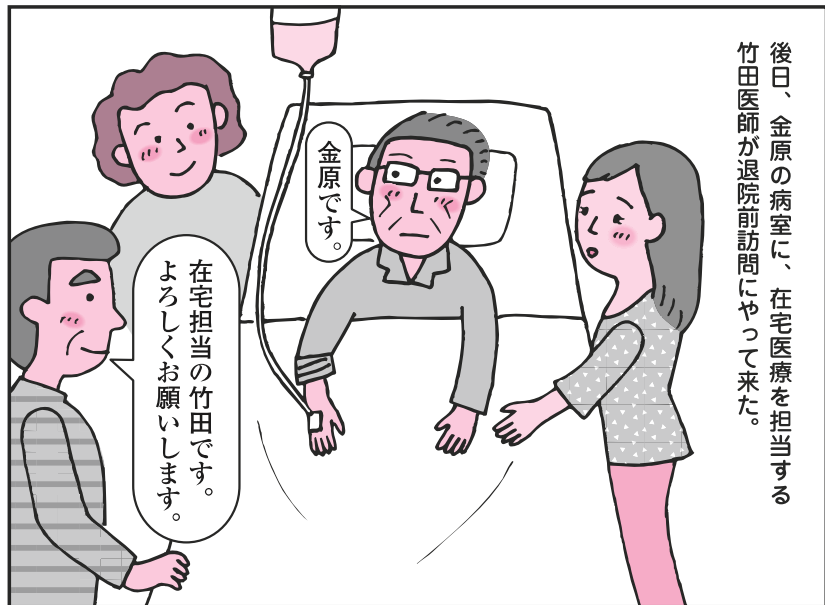
会社にも事情を話し、一か月休職。

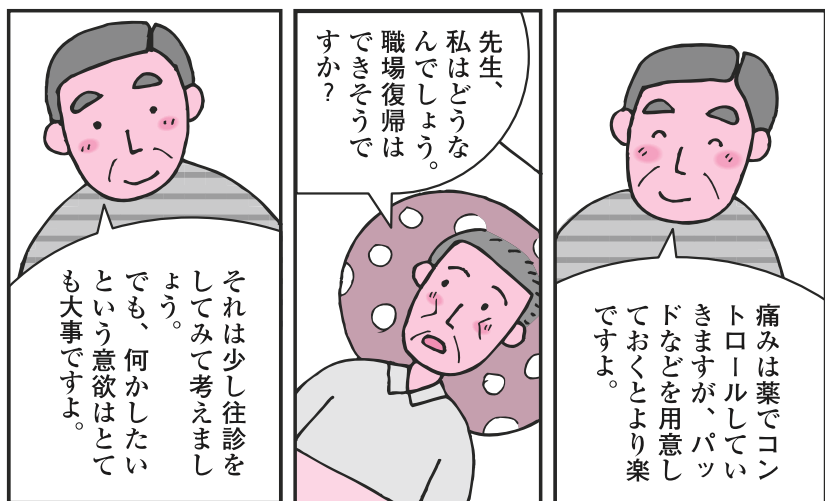
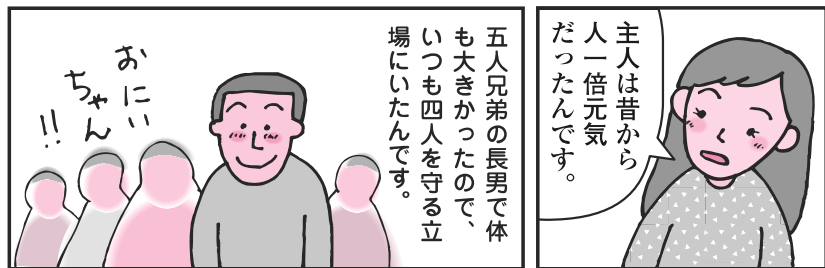
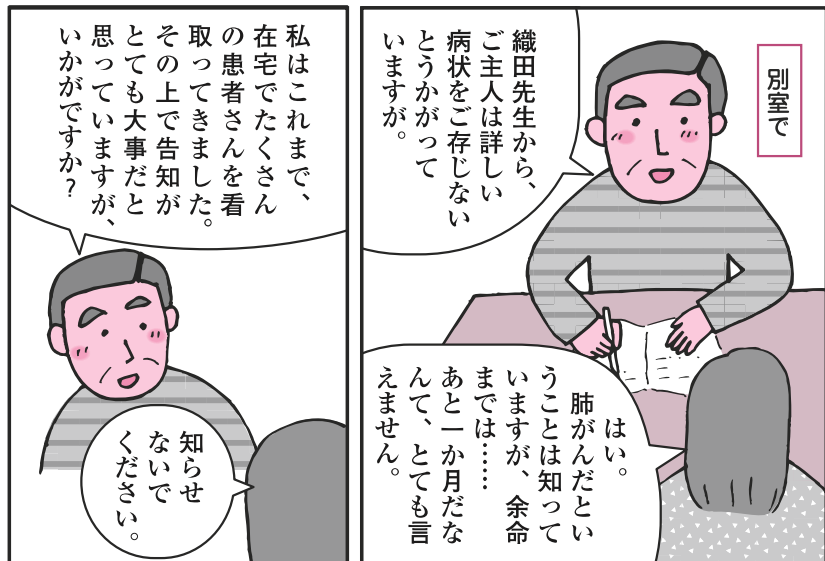














親しい人が次々に見舞いに
やって来た。

おまえは
本当にいい
キャプテン
だったよ。

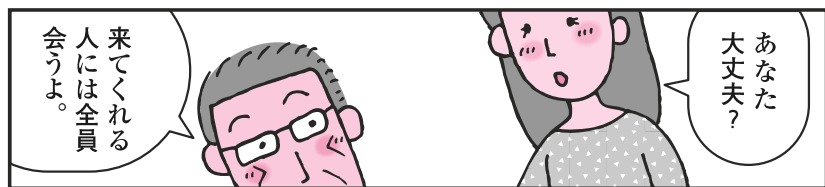
ほらっ
思い出
のボー
ルだ。
置いて行く
からな。



小島や石井もやって来た。
君たちのような後輩が
いて僕は幸せだよ。

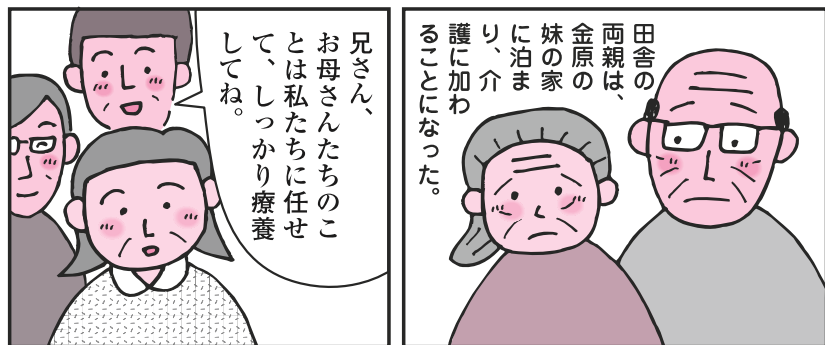
自分も
です。

金原さん……



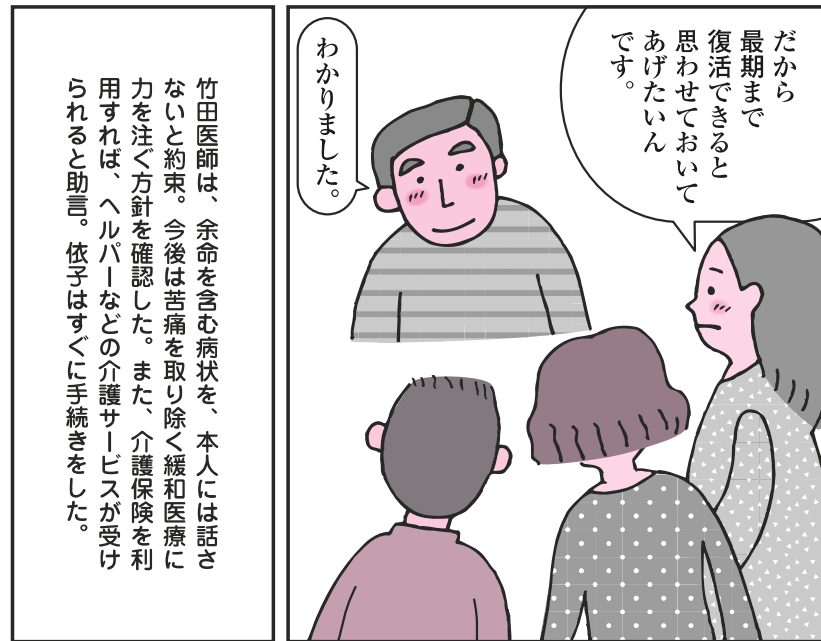
あなた
大丈夫？

来てくれる
人には全員
会おうよ。



田舎の
両親は、
金原の
妹の家
に泊ま
り、介
護に加わ
ることになった。

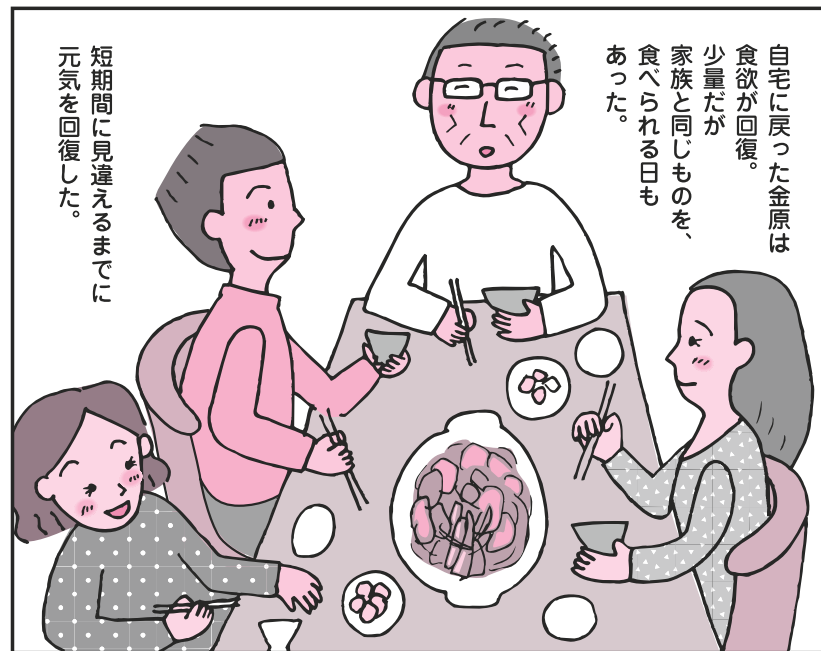
兄さん、
お母さんたちのこ
とは私たちに任せ
て、しっかり療養
してね。



だから
最期まで
復活できると
思わせておいて
あげたいん
です。

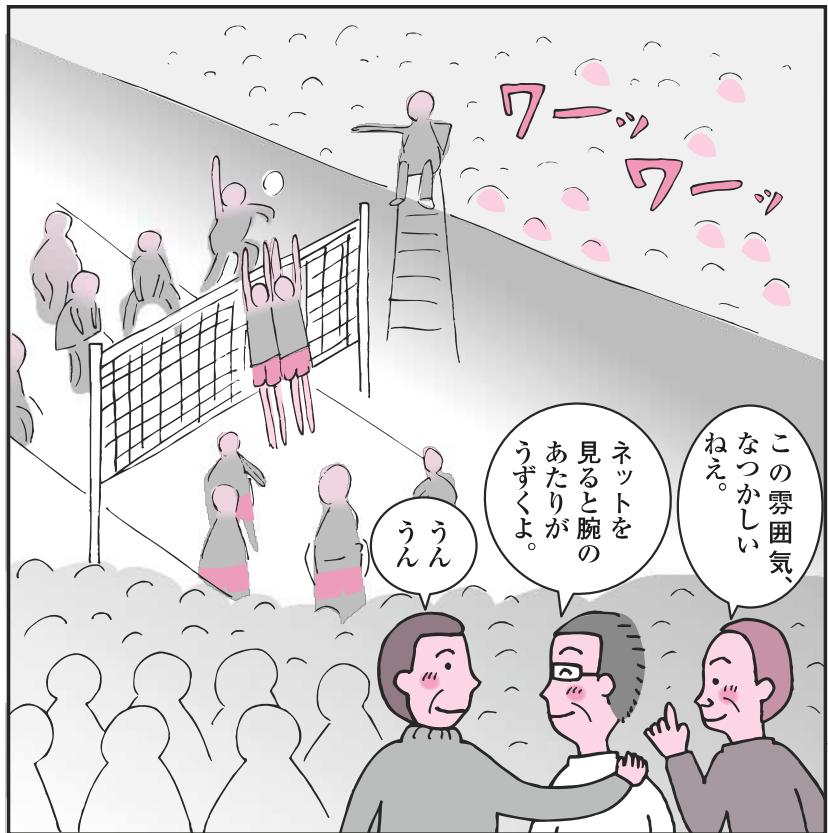
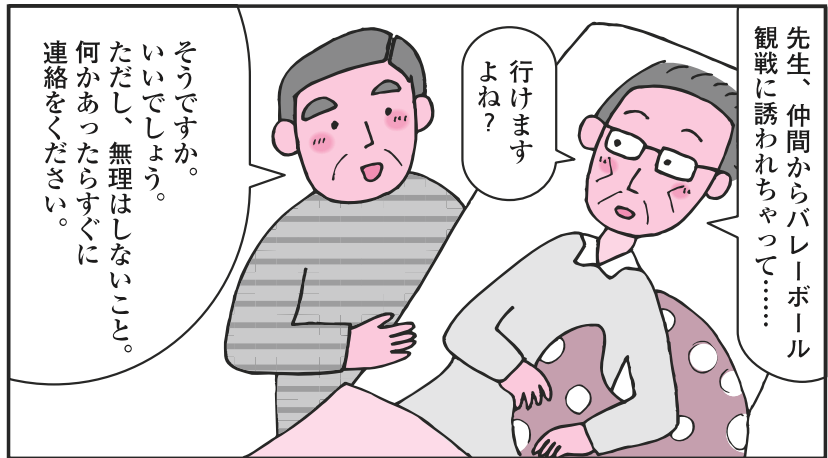
わかりました。

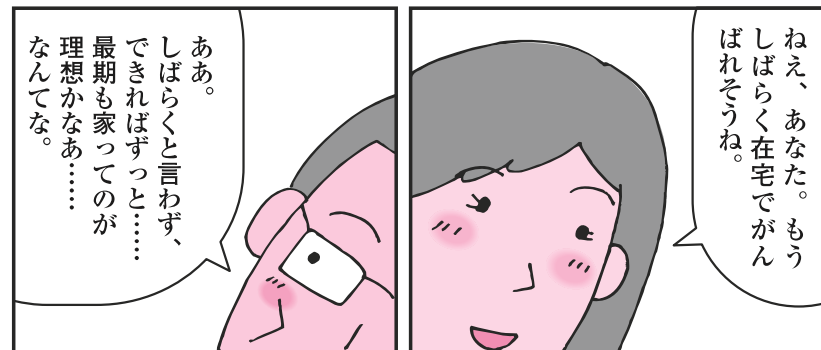
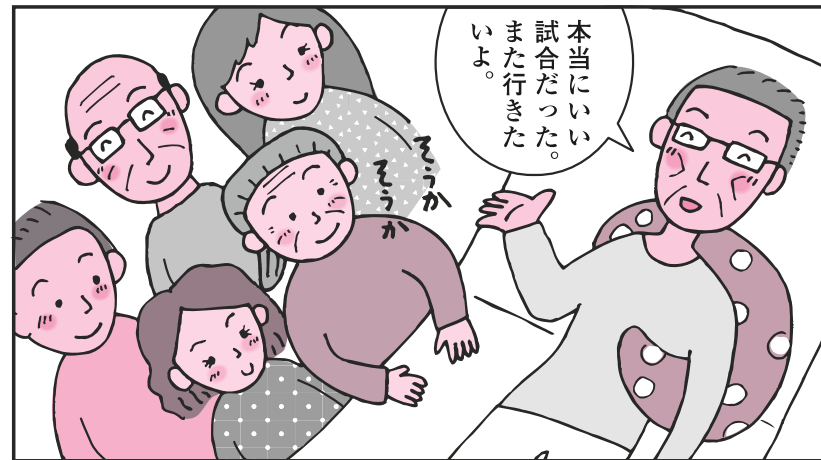
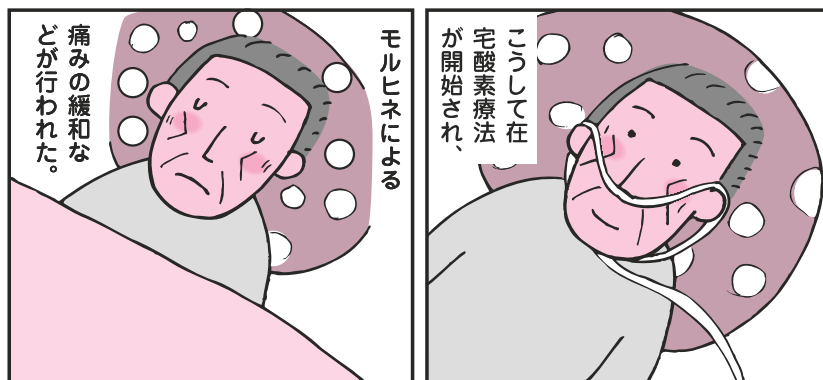
竹田医師は、余命を含む病状を、本人には話さ
ないと約束。今後は苦痛を取り除く緩和医療に
力を注ぐ方針を確認した。また、介護保険を利
用すれば、ヘルパーなどの介護サービスが受け
られると助言。依子はすぐに手続きをした。



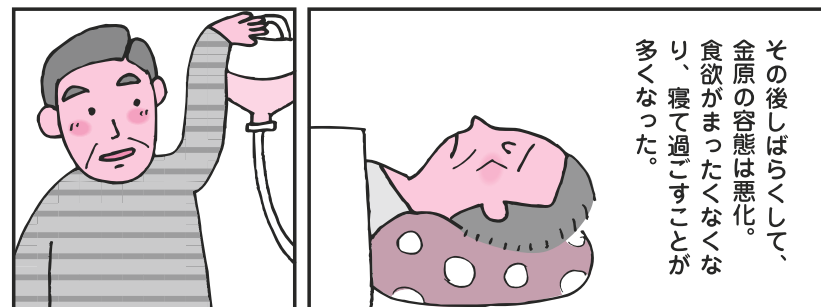
自宅に戻った金原は
食欲が回復。
少量だが
家族と同じものを、
食べられる日も
あった。

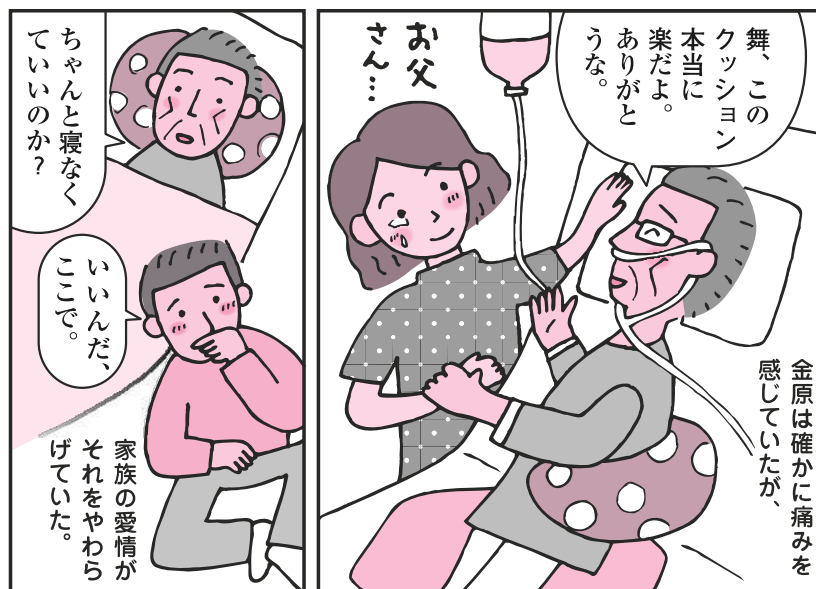
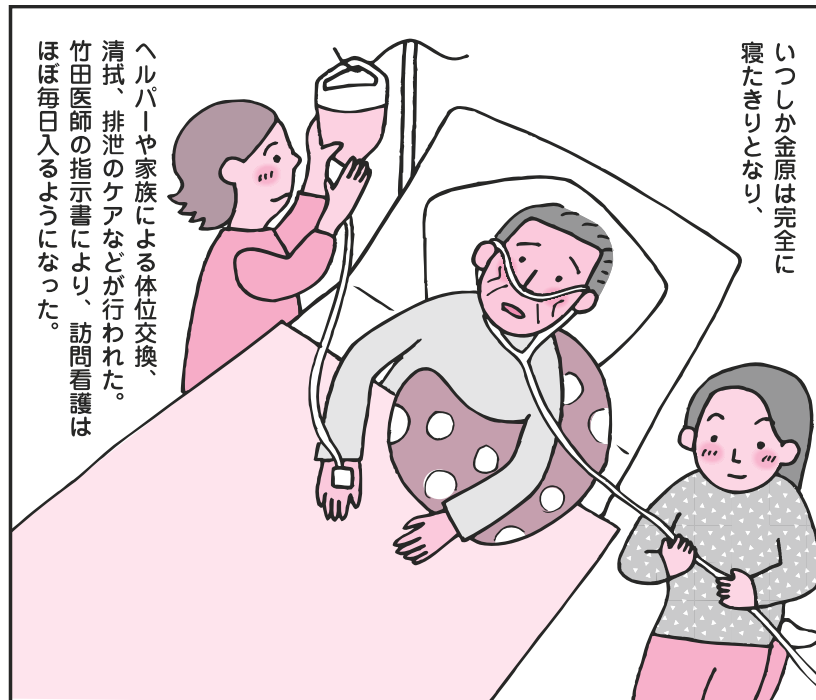
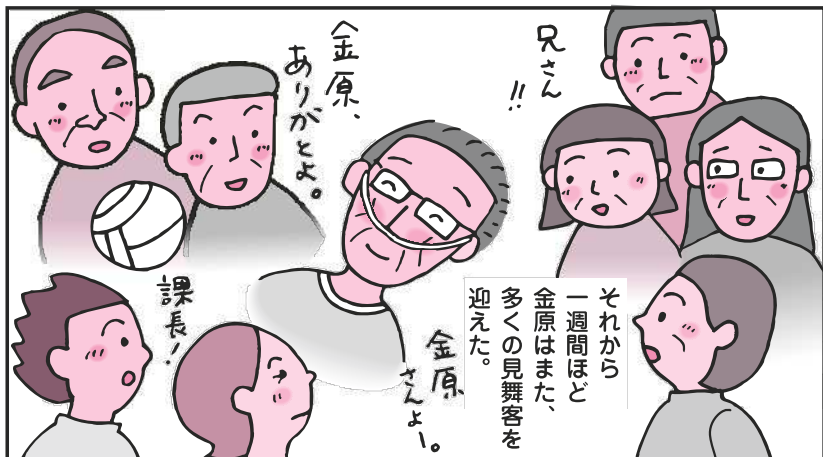
短期間に見違えるまでに
元気を回復した。

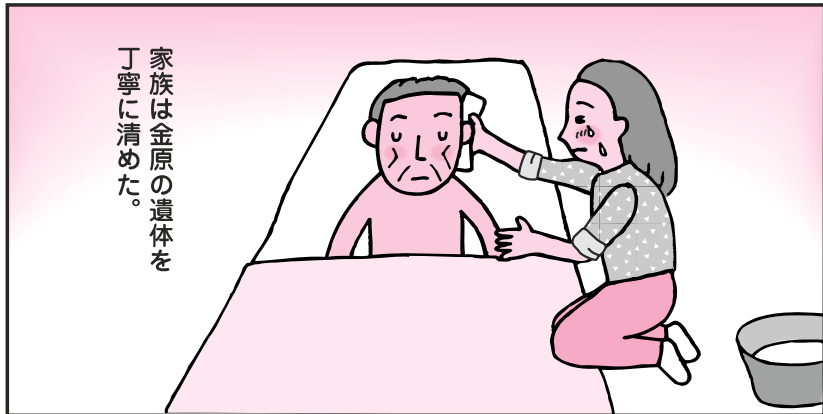




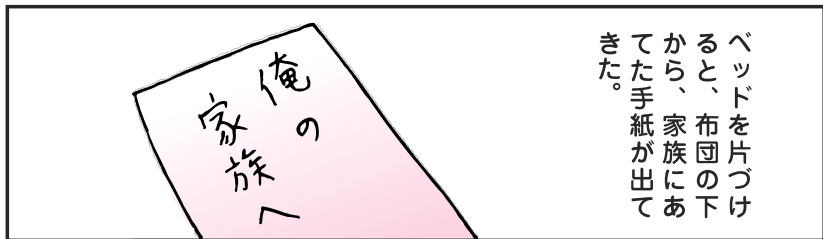
金原は、このとき、自分はずっと長くはないと感じ始めていた。







家族は金原の遺体を丁寧に清めた。



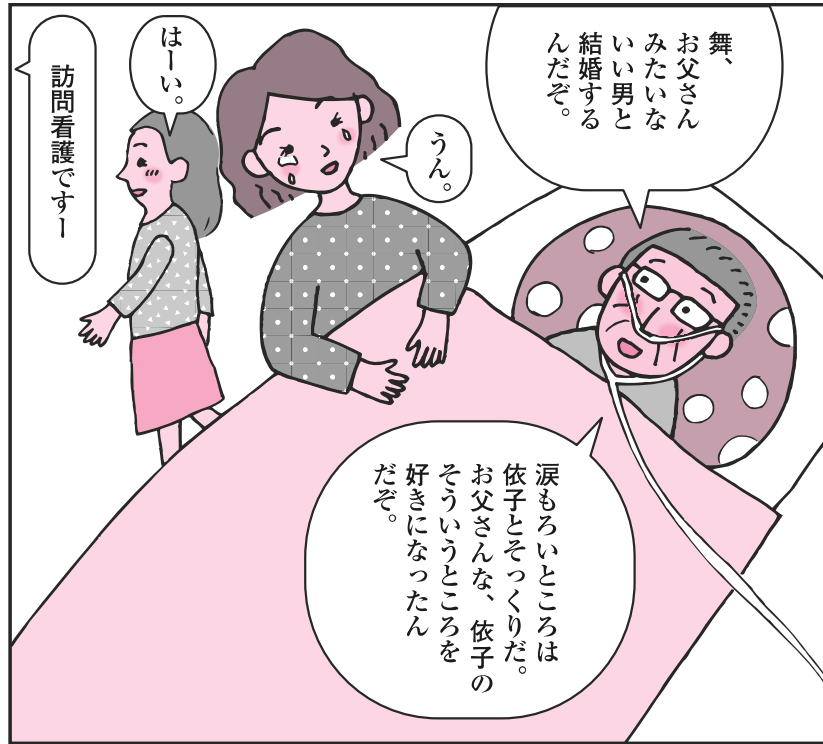
ベッドを片づけると、布団の下から、家族にあってた手紙が出てきた。

おやじ、おふくろ先に逝くことになってしまい、本当にすみません。お二人の夏子に生まれてよかった。最後に一緒に過ごせて幸せでした。

聡、舞、俺はおまえたちの中で生き続ける。力いっぱい生きていけよ。おまえたちはおれにとってサイコーの子どもだよ。

依子 惚れ直したよ。何年でも待っているから、また俺のところへ来いよ。竹田先生にくれぐれもお礼を言ってくれ。先生のおかげでいい最期を迎えられたんだ。おまえもそう思うだろう。じゃあ、またな。

孝



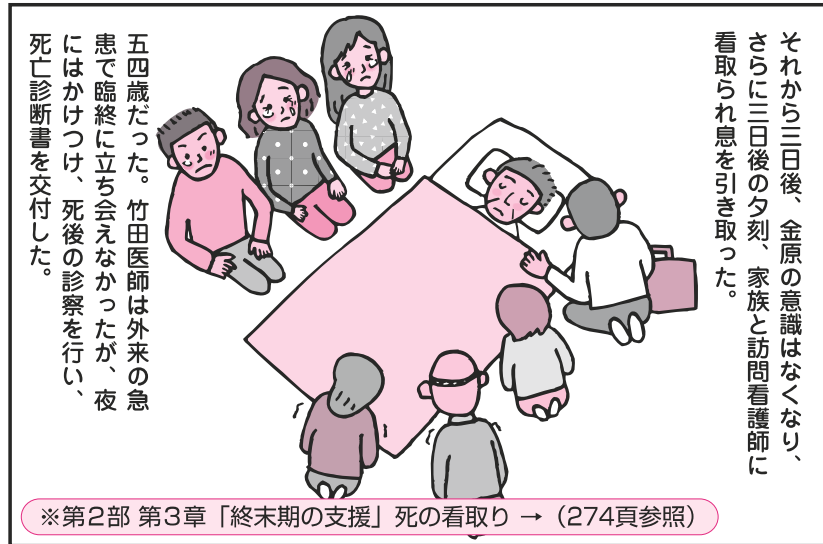
舞、お父さんみたいないい男と結婚するんだぞ。

うん。

はい。

訪問看護ですー

涙もろいところは依子とそっくりだ。お父さんな、依子のそういうところを好きになったんだぞ。



それから三日後、金原の意識はなくなり、さらに三日後の夕刻、家族と訪問看護師に看取られ息を引き取った。

五四歳だった。竹田医師は外来の急患で臨終に立ち会えなかったが、夜にはかけつけ、死後の診察を行い、死亡診断書を交付した。

※第2部 第3章「終末期の支援」死の看取り → (274頁参照)